

中国・台湾における白川文字学の受容

張 莉

はじめに

白川静博士の文字学（以下白川文字学という）は日本においては、様々な知識人に支持されたことにより学問として認知されるに至った。私は日本にやってきてから漢字学を学び、最初は中国の文字学者の字源解釈を学んでいた。そのうち白川文字学を学び、博士の提唱する漢字の字源については概ね正しいと思え、且つ系列文字の体系を学んでその解釈の整合性に驚かされた。

白川文字学が日本と同じ漢字圏である中国・台湾においては一体どのくらい認知されているのだろうか。まず、その実態を明らかにしていきたいと考える。従来の中国漢字学者の文字学の方法を提示し、それを白川文字学に対照してそれらの違いについて述べたい。また、「口」「史」「文」を例にとり、中国漢字学者の字源解釈と白川文字学を対照し、その違いについても明らかにしたい。さらに、白川文字学のどう言った特徴を中国・台湾の文字学者に伝えたいかを提示したい。

一、白川静先生著作の中国語翻訳の現状

1. 中国大陆に於ける白川静博士の翻訳書

（1）白川博士の著書翻訳

- ① 王孝廉譯『中国神話』長安出版社、1983年
- ② 『中国の神話』中央公論社、昭和50年9月
- ③ 何乃英譯『中国古代民俗』陝西人民美術出版社、1988年11月
- ④ 『中国古代の民俗』講談社学術文庫、昭和55年5月
- ⑤ 袁林譯『西周史略』三秦出版社、1992年5月
- ⑥ 『金文通釋』四六輯・四七輯「西周史略」白鶴美術館、昭和52年4月・10月
- ⑦ 曹兆蘭選譯『金文通釋選譯』武漢大学出版社、2000年3月
- ⑧ 『金文通釋』白鶴美術館、昭和37年8月～59年3月
- ⑨ 朱家駿主編『漢字』厦門大学出版社、2005年2月
- ⑩ 『漢字の世界1 中国文化の原点』、『漢字の世界2 中国文化の原点』平凡社、昭和51年1月・3月

⑥ 蘇水譯『常用字解』九州出版社、2010年10月

〔常用字解〕平凡社、2003年12月）

⑦ 鄭威譯『漢字百話』（繁体字版）大象出版社、2012年4月（初版）

〔漢字百話〕中公新書、1978年4月）

⑧ 鄭威譯『漢字百話』（繁体字版）大象出版社、2016年4月（二版）

〔漢字百話〕中公新書、1978年4月）

⑨ 張莉譯『白川静文字学の精華』天津人民出版社、2012年12月

〔釋文〕『釋史』『甲骨金文論叢』上 平凡社、2008年6月）

⑩ 吳守鋼譯『孔子傳』人民出版社、2014年2月

〔孔子傳〕中公文庫、1991年1月）

⑪ 鄭威譯『漢字百話』（簡体字版）中信出版社、2014年5月

〔漢字百話〕中公新書、1978年4月）

（2）白川静博士の論文翻訳

① 許禮平譯『金文学史』（一）（二）『中国語文研究』第3・6期

〔『金文通釋』四一輯・四二輯「通論篇一・通論篇二」白鶴美術館、昭和49年6月・7月）

② 劉志揚譯「周初殷人活動」『日本学者研究中国論著選譯三卷』上

古秦漢 中華書局、1993年11月

〔周初における殷人の活動―主として軍事関係の考察〕『古代学』一

卷一号昭和27年1月）

③ 高廣政譯「斉侯盤」『管子学刊』2003年第1期

2. 台湾に於ける白川静博士の翻訳書

（1）白川博士の著書翻訳

① 杜正勝譯『詩經研究』幼獅月刊叢書、民國63年9月

〔詩經―中国の古代歌謡』中央公論社、昭和45年6月）

② 杜正勝譯『詩經的世界』東大圖書公司、民國90年6月

〔詩經―中国の古代歌謡』中央公論社、昭和45年6月）

③ 温天河・蔡哲茂共譯『甲骨文的世界―古殷王朝的縮構』巨流圖書公司、民國66年9月

〔甲骨文の世界―古代殷王朝の構造』平凡社、昭和47年2月）

④ 加地伸行・範月嬌共譯『中國古代文化』天津出版社、民國72年5月

〔中国古代の文化』講談社、昭和54年10月）

⑤ 温天河・蔡哲茂共譯『金文的世界』聯經出版事業公司、民國78年8月

〔金文の世界―殷周社会史』平凡社、昭和46年4月）

⑥ 韓文譯『孔子』聯經出版公司、2013年10月

〔孔子傳』中公文庫、1991年1月）

（2）白川静博士の論文の翻訳

① 徐復觀譯「對於訓詁的思惟形式」『民主評論』9卷7期、民國47年

4月

〔訓詁に於ける思惟の形式について』立命館文学六四号、昭和23年3月）

② 「懷念董作賓教授」梁英茂譯『中国文字』18号、民國54年12月

〔董作賓教授を想う』『古代文化』一三卷四号、昭和39年10月）

③ 鄭清茂譯「作冊考」『中国文字』39・40号、民國60年3月、民國60

年6月

『甲骨金文学論集』「作冊考」朋友書店、昭和48年12月

④ 範月嬌譯「月令的形式」(七章一節)「採桑女」(六章二節)『日本漢学論文集』(一)

文史哲出版社、民國74年1月

『中国古代の民俗』講談社、昭和55年5月

⑤ 範月嬌譯「淮戎與 氏諸器」『日本漢学論文集』(一) 文史哲出版社、民國74年1月

〔淮戎と 氏諸器〕『立命館文学』四一・八、四一九・四二〇・四二一、昭和55年6月

二. 中国文字学者の研究方法について

1. 羅振玉は『殷墟書契考釈』に古文字考釈の方法について、「由許書以溯金文、由金文以窺書契」¹⁾と述べている。金文を探るのに許慎の『説文解字』より考察し、甲骨文字については金文より考察する。『説文』を重視するが、『説文』にすべて拘るのではない。

2. 王国維は「二重証據法」について、「吾輩生於今日、幸於紙上之材料外、更得地下之材料。由此種材料、我輩固得據以補正紙上之材料、亦得証明古書某部分全為實錄、即百家不雅馴之言、亦不無表示一面之事實。此二重証據法、惟在今日始得為之」²⁾と述べている。王国維は古代文献を重視するとともに、甲骨文・金文等の発掘された地下資料を重要視し、この二つの論拠を刷り合わせて真実を得ようとした。これを二重証據法という。

3. 唐蘭は古文字認識の方法として「怎樣去認識古文字」³⁾(どういふふうに古文字を認識するか)

「怎樣辨明古文字的形体」(どのようにして古文字の形体を識別するか)「対照法」「推勘法」「偏旁分析」「歴史的考証」などを提唱した。

甲骨文・金文について、原資料の傷みによる判別の困難、文字を書いた人の不統一・間違い・省略形も多く発見されている。拓本・臨摸により生じた判別の困難等も注意すべきである。それらの学習を十分に経た後見識をもつこと、対象とする文字の原資料の周囲の文字を通読して意味を明らかにすることが重要であるとする。

◇「対照法——或比較法」

初期の古文字研究には『説文解字』あるいは『三体石經』の小篆・隸書・古文の文字の形と比較対照して未解読の甲骨文・金文の文字の正体を探る方法がとられた。このようにして理解された古文字を通してさらに新出の甲骨文・金文等の文字を見極める方法を「対照法」と言う。

◇「推勘法」

未解読の古文字についてある文字を仮説として設定する方法。文章の前後の意味から未解読文字の正体がわかる可能性は十分考えられる。しかしながらこの方法は間違いやすいので注意を要する。

◇「偏旁分析法」

孫詒讓が多くこの方法を用いた。偏旁を分析し文字を各パーツに分けてパーツ毎の意味について言及し、未解読の文字を各々のパーツの集合体として意味をとらえる。古文字の謎解きの方法の一つである。

義の確かな字のパーツの組み合わせによって生じた新たな義を参考に
するものである。この方法は多くの成果を得てきた。この方法を用い
る際には先入観を廃し、できるかぎり多くの資料を用い客観的な分析
をする必要がある。

◇「歴史考証法」

文字が発生してから幾多の変遷があり、形や義の変化が起こった。
甲骨文・金文の変遷の実態を正しく知ることが必要である。「偏旁分析」
は研究の横の部分であり、「歴史的考証」は研究の縦の部分である。
このふたつの研究は重要である。その中でも「歴史的考証」は最も重
要とされるものである。ある文字は長期に固定的であるが、ある文字
は流動的である。文字の歴史を考証することなしに古文字の真偽を決
することはできない。

4. 楊樹達『積微居金文説』

「每釋一器，首求字形之無悟，終期文義之大安，初因字以求義，繼復
因義而定字。義有不合，則活用其字形，借助於文法，乞靈於聲韻，以
假讀通之¹⁾」と述べている。

「一つの器物の銘文を考釈するたびに、最初に字形の齟齬がないよう
に求め、最後に文の意味が大過のないよう期待する。初めは文字から
意味を求め、次いで意味によって文字を確定する。意味がうまく合わ
なければ、字形を活用し、文法の助けを借り、音韻にすがって、通借
字を用いて読み、意味が通じるようにする」

上述は、古文字研究における形・音・義三者の関係を実にうまくま

とめている。古文字を考釈する際にも、必ず形・音・義の三者を一緒
に考察しなくてはならない。

5. 李学勤『中国古代漢字学の第一歩』⁵⁾

◇字形を正確に識別する二つの方法

文字の構造を分析することと、既知の文字との比較対照である。
文字の構造を分析すること、すなわち「偏旁分析法」或いは「形体分
析法」と呼ぶ。

既知の文字との比較対照を行う。最初に『説文』に載せられている字
形と比較し、その次に他のすでに識別された古文字とも比較対照する。
◇釋文の検証法については文意が通じるか否かを主眼とする。

ある文字を積文に記述した後、それを原文の中に戻して、上下の文
が通じるかどうか確認することを忘れてはならない。そうすることが、
その積文が適切かどうかを知るのに一番良い検証法なのである。古文
字を考釈する時には、ただ『甲骨文編』や『金文編』といった類の字
書を開いて、一、二の特殊な字形の文字を見るだけで、孤立した解釈
をするのは極力避けるべきである。そのようなやり方では、原文の上
下の意味にまで配慮するのは難しいため、積文も必ず信頼できないも
のになる。なぜなら、正に楊樹達先生のいうような「初めは字に因り
て以て義を求め、繼いで復た義に因りて字を定む」というやり方をし
ていないからである。本当に積文が正しければ、必ず文章の上下がス
ムーズに通じるものである。もしも積文を原文にあてはめてみて、ど
んなに解釈しようとしても文意が通じ難いようであれば、その積読は

もう一度考え直す必要がある。

◇文献学や考古学の成果を応用する

古文字学界の現状からみて、考古学との関係を強めるように努め、研究の中で考古学が提供する手法や成果をできるだけ利用することが有益である。過去に出版された古文字に関する書籍のいくつかは、考古学的方法と結合させて研究を展開するのに適していない。例えば、金文に関する書物にただ拓本や模本があるだけで、器物の写真がなく寸法や重量の記載もなく、発見状況の記述も少ないといったものである。こういった現象が作り出された原因は、当時の学者が文字を偏重して、研究に限界があったからである。今日の古文字学とかつての金石学との違いは、まさしくここに現れている。考古学的見地による時代考証や発見の際の他の出土物などの考察を通して、金文を解釈することが必要である。

6. 高明『中国古文字学通論』の「古文字的考釈方法」⁶⁾

古文字の解釈法として因襲比較法、辞例推勘法、偏旁分析法、禮俗制度による釈字を説明している。

◇「因襲比較法」

楊樹達の唱えた方法である。『説文解字』以外にも、甲骨文、銅器銘文、石刻、簡書、帛書、盟書、陶文、璽印、幣文及び漢魏石刻、唐人書卷等を字源の解釈について比較参照する。

◇「辞例推勘法」

二つの方法から推理し検証する。一は、文献中の事例や銘文を推理

し検証する。一は、例えば銅器の銘文の言葉の内容などを推理し検証する。

◇「偏旁分析法」

『説文解字』以来の偏旁に着目する方法である。孫詒讓は偏旁を古文字の認識に照らして分析し、その偏旁の不同の意味を求め、それを同じ偏旁を用いた単体の漢字に適応するという方法を始めた。

◇「據禮俗制度釋字」

歴史上の風俗、禮樂、法律等各種制度を考察し古文字の釈字に照らし合わせる方法である。適用範囲が限られているが、探索手段として可能である。

三. 中国における文字学のない白川文字学の特徴

1. 「世界漢字学会」における白川文字学についての発表の際の出来事

2013年8月、上海の華東師範大学で行われた「世界漢字学会」第1回年会において「關於日本漢学家白川静的文字学体系」を発表した。その際にあつたことを述べたいと思う。

白川静博士の漢字学の体系を紹介するとともに、いくつかの例を挙げて漢字の字源を説明するというのが主な内容であつた。白川博士の「言」と「音」の説明をした。例えば、「言」は甲骨文を「𠄎」につくり、金文を「𠄎」につくる。「音」は金文を「𠄎」につくる。「音」の金文は「言」の金文の「D」の中に「一」を加えたものである。

白川博士によると、「言」は「辛」と「口(D)」に従う文字で、「辛

は入れ墨用の針で、明誓のときには自己詛盟を行ない、もし違約の時は入れ墨の刑罰を受けることを意味する⁷⁾。それに対して、「音」は「言」と「一」に従う字で、人が神に祈りごと（言）をした時に、神の反応があるときは音をもって答えることをいう。これを「音なひ」といい、日本の『古語辞典』⁸⁾では「音なひ」は「動詞『音なふ』の連用形が名詞化した語」、「音なふ」は「音を立てる。訪れる。たよりをする」という意味になる。つまり、神の音をもってする反応とは、神の訪れることなのである。なぜなら、なぜ「訪れる」ことを「音なふ」という「音」を含んだ語で言い表すかを誰もわかっていなかったのに、白川博士の説明により、初めてこの二つが同じ意味であることが結びついたからである。

この説明をしたときに、中国の文字学者たちは一斉に反対意見を述べ始めた。現代中国語の辞書を引くと、「音信」はあるのですが「音なふ」訪れる」という意味は載っていないからである。おそらく、白川博士が上述の解釈に至ったのは、「音なふ」の解釈が日本に残っていたことと博士の慧眼によるところが多かったと思われる。私は、そんな状況の中でどう答えてよいかわからず困っていたが、中国文字学の重鎮である王宇信先生（中国社会科学院歴史研究所研究員）が「漢字の字義を巡っては様々な解釈があり、冷静に聞きましよう。白川先生の解釈にはきちんとした理由があるはずです」と言ってくれて、事態が収まった。

2. 白川文字学の系列文字の解釈

白川文字学の特徴は、文字の音にとらわれず、文字の中にある符号がいろいろな文字の中で貫通した意味をもつとしたことである。しかも、その符号が、偏旁冠脚よりもっと小さい形態素であっても同様に貫通した意味をもつものとする。

(1) 例えば「口(D)」という字がある。『説文』においては形声文字においては偏と旁、会意文字においてはおのおの意味をもつ偏旁の単位が文字の意味を決定する最小の単位である。ところが、白川文字学ではそれよりもっと分化した漢字の符号に目を向ける。例えば、「言」は甲骨文では「𠄎」につくり、この文字の上部は「辛」であり入れ墨用の針を指す。「口(D)」は神に占いを問う文章を入れる祝禱の器で、祝禱とは神にお願いする祝詞のことである。「言」は「口(D)」の上に「辛」を置いて神に誓うことばをいい、違約の時には入れ墨の刑罰を受けることを意味する。また、「音」は金文を「𠄎」につくり、この字は「言」の「口(D)」の中に一を加えた文字である。「言」の祈りに対して神の反応があるときは「神の音なひ(訪れ)」としての暗示があるとされ、その「音なひ」を「音」という。このような解釈は従来の文字学者にはない、まったく新しい解釈である。私は白川博士の「言」と「音」の解釈に出会ったとき、何か背中にぞくぞくと走る興奮のようなものを覚えた。『説文』で最小単位の符号とされてきた「言」が「辛」と「口(D)」に分化され、それぞれが独立した意味をもつことさえ、従来の文字学者にはおよびもつかなかったことである。ましてや、「言」と「音」が意味上でこのようなつながりの

あることはまったくすばらしい発見というほかはない。古代中国において神の啓示がどのようになされるは、誰しも興味があるところだと思いが、白川博士は人間の言問いに對して神が音で反応するとした考えには本当に驚かされた。また、「おとなう」は『広辞苑』（第五版）でみると「①音を立てる。ひびく。②訪問する。おとずれる。③手紙を出す。音信する。」となっている。ここに、「音のひびき」が「神の訪れ」であるとする白川博士の「音」の解釈は、古代からある「おとなう」という言葉との意味的な一致を見るのである。

(2) 例えば「白」という文字を通して系列文字を考えてみる。

中国の文字学者の「白」の解釈は以下の通りである。
郭沫若……親指の爪の形
陳世輝……人の頭をかたどったもの
高笏之……髪を結った人面の形
朱駿聲……日の出前に東方の空が白い色を發する様子
孫海波……白は伯に用いる字

これらに對して白川博士は、白を髑髏の色であるとする。その根拠は「伯」という字にあったようである。「偉大な指導者や敵の首長たちの首は白骨化して保存された。従ってその首長たちは伯という^⑩」。他の文字学者は「白」の字形しか見ていないから白川博士のような解釈は出てこない。また「魂魄」について『礼記』郊特性に「魂氣は天に歸し、形魄は地に歸す」とある。「魂」は人間の精神的なもの、「魄」は地上的なものといえる。つまり、「魄」の「白」は地上的・肉体的な髑髏の白を表している。

中国の文字学者は「白」の字形から字源を解こうとしたが、白川博士は「伯」や「魄」といった「白」を含んだ文字群に「白」の体系的な意味があることから、「白」の意味を解釈した。これが、白川博士の文字学の一番の特徴である。

(3) 白川文字学に見られる系列文字の例は以下の通りである。

載書 口 (D) 右 召 古 固 可 各 司 谷 (俗・欲・容) 周
告 啟 啓……
祭祀 史 事 使 吏 祭 祀 有 宜
神 梯 陰 陽 陟 降 隱 際 隙 隔 阿 隰 限 陋 隊 墜
防 階 隈……
文 身 文 彪 彦 顏 斐 彰 爽 爽 爾
軍 令 禾 秝 和 休 厯 曆 歷 戲 劇 取
鳥 占 進 鳴 唯 雖 雁 應 膺 雛
他にも多く系列文字があげられている。

3. 白川文字学の民俗学的方法

白川博士は『中国古代の民俗』において次のように述べている。
「私はこの書で、三つの方法を試みようとした。それは古代文字の構造を通じて考えられる古代人の生活と思维、古代歌謡としての詩篇の発想と表現とを通じてみられる生活習俗のありかた、そして第三には、それによってえられたところのものを、わが国の古代の民俗的な事実と対応させながら、比較して考えるという方法である^⑪」

「古代歌謡と民俗」の観察から、『万葉集』と『詩経』との間には共通する問題があるとされた。枕詞が地霊へのよびかけの意味をもち、詩経において興は、その字義において地霊への魂鎮めの意味をもつ。『詩経』と『万葉集』において同じ発想にもつづく表現がみられることを看破した。それらの考え方を原点として、古代文字の語源が、当時の民俗を反映していることに注目した。そしてその民俗の原点には古代の宗教的信仰とか自然観があるとしたのである。

白川博士は「もしこの文字の背後に、文字以前の、はかり知れぬ悠遠な言葉の時代の記憶が残されているとすれば、漢字の体系は、この文化圏における人類の歩みを貫いて、その歴史を如実に示す地層の断面であるといえよう。またその意味で漢字は、人類にとっての貴重な文化的遺産であるといえることができる」と述べている。このことは文字の形象から、逆に古代の民俗があぶりだされる可能性を述べていることになる。このように、文字学の字源はその文字が作られた時代の民俗を反映しており、それを文字学の視点に据えるというやり方が、白川文字学の特徴といえることができる。

4. 殷代文化の根元に在る「呪」の思想

神に祈ることは「呪」と言います。なぜなら、原初的な宗教は荒ぶる自然に対して、祟りを受けないためにはどのようなしたらよいかテーマであった。「呪」は「口（D）」と「兄」に従い、「兄」が祝禱の器である「口（D）」を戴いて祈ることを意味する。したがって、殷代の頃は「祝」と同じ意味で、後に呪文・呪詛など呪いの意味にな

る。呪能とは、神に交信して神を呼び起こす能力を指す。白川博士は「文字は、ことばの呪能をそこに定着するものであり、書かれた文字は呪能をもつものとされた」と述べている。白川博士が考えた文字創世期の人々の考え方は、すべての個人や集団の未来を神に託し、神を自分の味方につけることによって未来を切り開こうとすることだったようである。古代人はそのために神に対して「呪」なる祭祀を行った。私は、白川博士が漢字の謎解きをするための最大の前提は「呪」だと思っている。白川博士は「漢字の諸問題」の中で「文字の構成要素を厳密に分析し、その形象の含む意味を、当時の人々の生活と意識に即してとらえるのでなければならぬ」と述べています。「当時の人々の意識」の最たるものが「呪」なのである。

甲骨文の底流に「呪」の觀念が常にあることを看破したのは白川博士のすばらしい功績で、それ以前の日中の文字学者にもそのような考え方が皆無である。白川文字学は何でも古代の宗教にこじつけというあまり白川文字学をご存じない方のご批判もある。中国の文字学者も白川説をこの点で批判しているものも見受けられる。しかしながら、白川文字学を通観すれば、甲骨文が卜いのために作られた文字であることが十分理解できる。

四. 中国の文字学者の白川文字学に対する解釈

1. 『字統』『字通』『字訓』の評価

朱順龍・何立民編著『中国古文字学基礎』の「白川静的贡献」の内容を以下に記述する。

「甲骨文の発見以来、中国の学者がどうしても到達したかったのは新しく出土した甲骨文中『説文解字』を考証することである。この方面で卓越し貢献があったのは于省吾であったが、彼はその事業をなして終えてはいなかった。

于省吾は『甲骨文字詁林』4冊（中華書局）を編集し、一つの文字に対する『説文』も含めた文字字者の解釈を集めた。読者が比較研究しやすい資料である。しかし、この本は『説文』の解釈の間違いを指摘したものではなく、あくまで解釈者の意見を羅列したものである。

（筆者注）

「初めて甲骨文字資料・金文資料を利用して、全面的な『説文解字』を考証したのは白川静である。1965年から白川静は引き続き15巻の『説文新義』を出版した。彼は甲骨文と金文資料を仔細にまた相互に考証し、『説文』の漢字字義の正確性を肯定し、当代の日本漢学界における『説文』研究の最高峰となった。そのほか彼は『字通』『字訓』『字統』等三部の字書を編纂した。彼は象形文字が未進化な文字であり、表音文字は進化した文字と認識することに反対した。象形文字の理論から言えば、漢字のような具体的な表現の言語文字は他にはない。このことは、当時ひたすら漢字を低く貶め言語文字の西洋化を主張することに対する正当かつ厳しい回答であった。」

これらを見ると、朱順龍・何立民は白川博士を『説文』研究の最高

峰と見なしているのである。漢字はアルファベットののような表音文字に比べて、その一つ一つが形をもっている。あたかも表音文字の方が漢字のような表意文字より進化していると考えられる人は多くいるが、白川博士はその考え方に与せず、表意文字である漢字は過去の文化をそのまま伝える貴重な文字だとしている。白川博士は『説文新義』を著し、甲骨文の解釈により『説文解字』の間違いを正した。これは文字学にとって大きな功績である。その後著された『字統』『字通』『字訓』は、日本の知識界にも衝撃的な影響を与えたといえることができる。

（筆者注）

2. 劉海宇「日本漢學家白川静及其文字学思想」を通してみる白川文字学

（1）白川静の古文字学思想

「白川静はすべての文字を各種体系の中にとらえて研究し、それらを声義等の関係に捜し求めた。これが「白川文字学」の最大の特徴である。

白川静は文字学を古代人類学的基础の上に立って論述し、両者は表裏一体だとする。例えば「臣」「民」は目を傷つけられた人であり、「童」「妾」は額に刺青を施した人であり、彼らは神靈的な犠牲として供せられ、甲骨文中に河神に妾を差し出す記載が見られる。

「口（**D**）」系列字「の《釋史》……「史」は**D**を木に著けた形で、これを手に持ち神に捧げて祭る祭儀、「使」は祭りの使者、「事」は祭りの使者の意と使者として行う祭事の意。

文身系列字の《釋文》……「文」の甲骨文は「𠄎」につくり、「𠄎」は胸に入れられた文身（入れ墨）を意味する。系列字に文・彦（彦）・顔（顔）・爽・爾などがある。

「自」系列字の《釋師》……「自」は郡の出行のときに携える際肉の形。系列字に師・追・遣・帰（歸）などがある。

古代巫術に関する媚盃に関連する字の《媚盃関係字説》……媚は巫女、巫盃媚道と呼ばれる呪詛を用いて魔女的な呪詛を行うこと。系列字に眉・媚・夢・蔑・蕘などがある。

軍札に関する「蔑曆」……蔑は媚と呼ばれる巫女を切り殺して敵方の呪力を奪うことで、曆はその軍行を表彰する意」

白川博士は文字系列という考え方を重視し、同じ文字系列には貫通した意味があると説く。白川博士は偏や旁よりもっと小さい文字要素、例えば歌や臨の口（口）に、この要素を含む文字に貫通した意味を求め、という方法論を採っている。この考え方は従来の文字学にはなく、今後の文字学の新しい方向性を示している。私が白川文字学を中国の文字学者に説得したい最大のポイントである。（筆者注）

（2）白川静古文字研究の不足について

「白川静の古文字研究は非常に特色があり、独自の見解を展開している。いささか不足なところもあれば、検討すべきところもある。

文字符号図像化についての理解は会意文字の範囲が広過ぎ、非常に簡単な形声文字を複雑な会意文字として理解する。古文字の字形の中には、時には形に意味がない飾りの書きぶりや符号があり、この符号

は字の音義と何ら関係がない。」

（3）白川静の「口」符号についての認識不足

「白川博士は「口（口）」を祝禱（神社の祝詞のようなもの）を入れる器とした。左は左手に呪具の工をもち、右は右手に祝禱の器をもち神に祈る意とした。「佑」は「口（口）」を右手に持ち神に祈り、佑助を求める意である……『口』は一種の孳乳のための新字の純粹符号の使用であって、具体的な表象を意味しない。……例えば高、商、周、啟、若等の字において、白川静は口（口）を祝告の器形と解釈している。しかし高の初形は𠄎、商の初形は𠄎であり、周の初形は𠄎であり、啓の初形は𠄎であり、若の初形は𠄎であり、これらの初形には「口」がなく、祝告祈禱の器形の義はどのように語られるのか？ ……『高』字の解釈は自己矛盾している。白川静は字形に『上部は望楼、楼観の形』とし、口を加えて『望楼』の上で祝告の儀を行なうこととする。……白川静はいつも民俗学的材料と観点から字形を分析する。ただしこの方法は時として不適當である。……例えば白川静は『佳』をもって声符の背景に、古代の出向前に行なう鳥占いの意味を認識している。鳥の状態が人の安否を預示し、推・進・唯・雖・維等の漢字はそれらの意味を包括している。……しかしながら錐・堆・唯・椎等の字は『佳』の声符であって、鳥占いに関連しているとどうして考えられるのか？ 白川静はこれらの字に対して、ただ『佳』声の形声字とのみ解釈し、鳥占いの民俗を説明に加えていない。」

白川博士は、「口」について祝禱の器としている。「口」には「祝

「兄」のように耳口の「口」とは解釈できないものが多く、それらは祭祀の符号として使われたものとしか考えようのないものも多くある。確かに「高」の「口」が祝禱の器かどうかと問われれば、私にも判断できかねる。祭祀の符号としての「D」には一定の範囲があると考えられる文字学者もいる。ともあれ、白川博士が「D」を耳口の口ではなく祭祀に関わる文字と看破することにより、多くの文字の解釈が可能になったのであるから、その点で白川博士の功績は大きいといえる。(筆者注)

3. 白氷『青銅器銘文研究—白川静金文学著作的成就与疏失』¹⁸にみる白川文字学

(1) 白川静在中国学術界の影響

「日本と中国の学者の中で、白川静の金文研究は成功していると言わねばならぬ。銘文の解釈、時代区分、文字考釈及び金文によって考察された歴史には系列的な解釈の成就が見られる。金文学を研究する多くの学者の中で、白川静は重要な人物である。彼が金文研究でなした豊富な成果により、国際漢学界の大家としての学術的地位を確立した。」

(2) 白氷の《金文通釈》的評述

「最初に諸家の説を多く採用し、考釈している。彼は各家の長所を集め、各家の観点に対して評述し、実際の学術的観点と符合するものを重視し、過分の評価をせず過ちを隠すことをせず、ただ各家の論の是非を論じた。……その次に原資料をもって根本とする。白川静の研

究は、おおげさな表現を避け、根拠のない論は極めて少なく、できるだけ根拠のある言葉を求め、第一資料の収集に心掛けて研究の立脚点・出発点としている。しかしながら《金文通釈》は日本語で撰述されたものであり、中国学者には使用しにくい。《金文通釈》を引用するものは、あるいは肯定しあるいは否定し、多い時は一段・半段の引用であり、少ない時は二、三言の言葉であったりして、全面的に引用しているものはない。」

(3) 白氷の《説文新義》的評述

「《説文新義》の33文字から分析すれば、白川静は甲骨文や金文資料を《説文解字》の間違いや手落ちに対して考証糾明し、そのような新しい意見を含むことが《説文新義》と名づけた主な原因である。その中には字形分析に重点を置くものがあり、字義の解釈に重点を置くものもあり、大部分は字形分析と字義の解釈とが結合している。字形分析にしても字義解釈にしても、新しい見方であり、具体的でないもの。全面的に分析した解釈でないものが含まれている。『口』載書説も新しい認識であるが正確であるかどうか？は、なお検討されなければならぬ。」¹⁹

筆者は2010年3月に「中国から見た白川文字学——白氷著『青銅器銘文研究—白川静金文学著作的成就与疏失』について」という論文を『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』に載せた。白氷は島根大学に留学の経験を持ち、帰国後この著書を書いている。著書を読むと、ところどころ日本語を誤訳しているところが見受けられるが、

概ね白川学の要点は捉えているとみてよい。白氷氏は白川博士の『金文通釈』における金文の解釈について大変評価しているが、甲骨文の解釈には正しい所もあるが正しくないものも含まれると説く。甲骨文はまだわかっていない部分が多く、不明は不明としてとらえるという白氷氏の考え方が意識の根底にあるように思われる。中国では白川博士の『金文通釈』は非常に評価が高いが、博士の甲骨文の解釈にはまだまだ理解されているとは言い難いのが現状である。中国の文字学の発展のためにも白川文字学の長所を知っていただくことは大変重要なことだといえる。(筆者注)

五. 中国文字学者と白川文字学の解釈について

白川文字学の代表的な文字解釈である「口(D)」について中国の漢字学者との解釈の違いを見てみよう。この比較により、白川博士の字源解釈の方向性が明白になる。

1. 「口(D)」についての各文字学者の解釈例

(1) 『説文解字』二上

「口，人所以言食也，象形」(人の言食する所以なり)

(2) 徐中舒主編『甲骨文字典』

① 甲骨文は口の形であり、人の言食の器官としている。

② 人名

③ 災禍の義ではないか、と推測している。甲骨文に「甲戌卜亡口(甲戌に卜して、口亡きか)」とあり、この口は災害の意味ではないかと

いうのである。亡は甲骨文で「亡」(困亡きか)とか「竜亡其雨(竜其れ雨をふらず亡きか)」など頻出しており、文意から「口」を災禍と見るものであろう。

(3) 饒宗頤『殷代貞卜人物通考』

甲骨文の「亡作口」「亡至口」の「口」は口舌の禍であるとする。舌禍とは自分が言った言葉で受ける災いをいう。

(4) 姚孝遂(于省吾主編『甲骨文字詁林』)

甲骨文の「口」を偏旁に使った文字、例えば「魯」「唐」「戚」「高」「君」「啓」等の「口」は単に区別符号であり、「口」の本義とは関係がない。

(5) 加藤常賢『漢字の起原』

饒炯がその著『説文部首訂卷二』に「凡そ空中にして洞達出入すべきものは、皆之を口と謂ふ」を受け、言食の口のみではなくすべての孔口を口の意味とし口の意味を「あな」と解説している。



(6) 趙誠『甲骨文字の二重性及其構形關係』

形は偏旁の中においてすべて口を表すのではない。私の整理により、以下の七種類にまとめる。

① 口を表すもの。基本的な形態である。卜辞に用例が一番多く

ある。例えば、「日」「甘」「齒」「聽」「聖」

「舌」

② 大きな口の器皿、現在の盆のようなものであり、これは口形の引伸である。例えば、「合」「會」。

③ 窓の形。窓は部屋の口のようなものである。だから、形

で代表する。例えば、「向」

④ 穴の形を象る。おおよそ穴は大地の上に開いている口のようである。したがって、形で代表する。例えば、「出」

「各」

⑤ 眼睛の形に象る。動物の眼睛は遠くから見れば、或いは正面から見れば穴のようなものである。したがって、の符号で表すことができる。例えば、「瞿」

⑥ 意味のない形としての使い方があつた。例えば、如「啓」

⑦ 一種の物体を象る。は「尹」「君」。意味を表さない。例えば、「兄」

「靈」

上述の挙例は、すべての形の甲骨文字の類型を言い表したものである。こういうような考証の仕方は、すべて信用できるわけではないが、ある時には正確な結論を導く。

(7) 林泰輔『支那上代之研究』

に从ふ字は二十以上あり、……又具をとし、冊をとせしは、その下にある横の形に象どりたりものなるべけれどども」……。

(8) 白川博士の「口(D)」説

① 「卜文・金文にみえる字形はのうち、口耳の口とみるべきものはほとんどなく、おおむね祝禱・盟誓を収める器の形であるの形に作る」

「賽は投げられた」はローマ時代のジュリアス・シーザーが、元老院にそむいて兵を挙げたときの有名な言葉である。白川博士もまた、「口(D)」説を発表し、当初は従来の文字学者たちからは反発されたり、無視されたりした。しかし、今は多くの人々がその説を認めるに至っている。

② 祝詞の器である「口(D)」は、「言」「音」だけではなくさまざまな文字に含まれている。いくつかの例を挙げてみたい。まず「古」という字である。「古」は『説文』三上に「故也、从十口、識前言者也(故なり、十と口に從ふ、前言を識る者なり)」とある。『説文』によると、「古」は「十」と「口」の会意文字であり、故(むかしのこと、いにしえ)であり、前言(古人の述べた言葉や前代の説話)を知っていることと述べている。この解釈を見て、何かしっくりしないものを感じるのは、私だけではないと思われる。それは「十」に対する解釈が抜け落ちているからだと思われる。白川博士は『説文』はおそらく、十人がそれぞれ口をもって相伝承すると解したもので、まったくの俗説としている。

博士によると、「古」の上の十は千の形だという。祝禱の詞を収めた「口(D)」の上に千をたて、これを安全に守るために千を置いたものと解する。そのことによって、祈りの効果を長い間保たせることを「古」という。さらに嚴重に守護する必要があるときには、外の囲いを加えた。これを「固」という。それではなぜ「古」が、現在の「ふるい」を意味するかというと、重要な事柄について占いされる内容の祝禱は、「典故」(古い規範や故実)として遵守されるものであり、そ

こから往古・先古の意が生まれるのである。『史牆盤』と呼ばれる周代の金石文に「曰古文王（古に曰う文王）」とあり、文王が古事・典故の伝承者であるという意味である。「古」はもともと抽象的な概念であって、故実・典故を意味する字を作るには何らかの比喩に頼らざるを得ない。この比喩が「干」と「口（**D**）」から成る「古」であったわけである。「故」は「古」を支（攴）で打つ形で、祈りの効果を生ずることであるから、「古い」のほかに故意にみられる「わざと」の意や事故に見られる「悪い出来事」の意を含むようになる。

- ③ 「兄」は『説文』八下では「長也（長なり）」とあり、それに対して清代に書かれた『段注』に「口之言無盡也、故以凡口爲滋長之意（口の言は盡くすること無し、故に凡口を以て滋長の意と為す）」と「兄」の「口」が耳口「口」であるとしている。しかしながら、『説文』は「兄」の意を述べるだけで、段玉裁にいたっては、なにやらこじつけがましく字源の説明にはなっていない。それに対して、白川博士の「口（**D**）」を適用すると、字源が容易に解釈される。「兄」は甲骨文を「**𠂔**」につくり、神に祈る祝詞を収める器である「口（**D**）」を戴いて神を祭る人を表す。「兄」が長兄の意となるのは、長男が家の祭事を掌ったからである。現在でも長兄が親の葬式の喪主になるのは、昔からのしきたりを踏襲しているからだと思われる。「兄」に「示」を付した「祝（祝）」という字があるが、長兄が祭事を担うことを「祝」といった。「口（**D**）」は古代中国の祭事における必須アイテムですから、『説文』や段玉裁に比べて、白川説が正しいことははや自明であろう。
- ④ 「舍」は旧字を「𠂔」につくり、「全」は把手のある針の形である。

この針が「口（**D**）」を突き刺しているのが「舍」である。これによって、祝禱の呪能はやぶられ、その呪能が失われるので、「捨てる」の意となる。「舍」は「捨（捨）」の元の字である。舎業は学問をやめることを意味し「捨」の意で使われている。「舍」が校舎や宿舍などの意味をもつのは、次の理由からである。祝禱の器「口（**D**）」を破る意から、祝禱の内容を外に宣べる意となり、命令を発することを「命を舍く」という。この「舍く」の意から、宿舍の舍に当たる意味が出てきたようである。『小克鼎』には「命を成周に舍く」とある。その古音は余に近く、『莊子』知北遊には「居」と韻している例が見られる。

⑤ 「害」は旧字を「𠂔」につくり、金文を「**𠂔**」につくる。「口（**D**）」を把手のある大きな針で突き刺して、呪能を喪失させることを意味する。それで「害」は「きずつける、そこなう、わざわい」の意となる。また、「吉」は「口（**D**）」の上に「土」を置いている。「土」は金文を「**土**」につくり、小さな鉞の歯を下にしておく形である。「王」は甲骨文を「**王**」につくり、大きな鉞の歯を下にしておく形であり、「王」は鉞を携えて戦争を指揮し、「土」は戦士階級として王に仕えた人である。「吉」字における「土」は祝詞の呪能を封じ込めて、これを守る意をもつ。ここから、吉善の意が生まれる。

⑥ 上記を見てわかるように、白川博士のいう「口（**D**）」は「言」「音」「古」「舍」「害」「吉」の各文字に一貫した意味をもって、他の文字要素と関わっている。それだけではなく、「召」「右」「可」「谷」「告」「吾」「啓」「曰」「旨」「習」「曆」「皆」などにも「口（**D**）」の意味が一貫して存在する。このようなことを語った文字学者は、白川博士以外に






はいない。投げられたサイ「口（D）」はみごとに古代中国の祭祀の姿を浮き彫りにしたのである。

2. 「史」についての各文字学者の解釈例


(1) 『説文解字』三下

「史、記事者也。从又持中。中正也」（史は事を記す者なり。又〈手〉の、中を持つるに従ふ。中は正なり）



(2) 徐中舒主編『甲骨文字典』

 は野獸を捕獲する干形であり、上に枝のついた捕獲器具である。 はYの上に縄で縛った形である。 は或いは に作り、 の簡略化されたものである。

(3) 馬敘倫『馬氏論文集』

史字の中の は筆の形であり、又に従い中を持って事柄を記録する意味である。

(4) 陳夢家「史字新釋」

史・事は獸を取る道具であり、 は田網の形である。田網には二つの部分があり、Yは武器の元となる原始工具であり、 は網の形である。

(5) 王國維「釋史」

『周禮』大史職にみえる「飾中」の「中」を執る形であるとしている。周禮大史職によると、「凡そ射事には中を飾り、筭を舍く」とある。即ち史は、この大史職に云うところの飾中舍筭（中をととのえ矢を入れること）、すなわち矢器をもつ形である。中は盛筭の器である。そ

うした矢器を扱う役人が本来の史であり、さらには史の職掌はそれ以外の仕事にも広がった。藏書（書策を保管する）や読書（祝詞・盟書などを読む）や作書（辞令を作成する）などが史の職掌となったのである。

(6) 吳大澂『説文古籀補』第三



史は記事なる者なり。手に簡を執る形に象る。

(7) 江永『周禮疑義舉要』秋官『皇清經解』卷二四八

其の字は又に従い中に従う。又は右手なり。手を以て簿書を持つなり。

(8) 姚孝遂《于省吾主編『甲骨文字詁林』

使者が木棒につけた旗をもつていく形。まだ未可知であり今後考える必要がある。


(9) 内藤湖南「支那に於ける史の起源」

「史」字の「中」は「盛筭の器」である。



(10) 加藤常賢『漢字の起原』

「中」の「一」を籌策（数をかぞえる竹の棒）と解し、古代では「数をかぞえる」ことと「読む」ことが一義であったとし、そこから大史・内史など歴史や宮中の記録を司る官名に使われたと解釈した。

(11) 白川静 新訂「字統」

中と又とに従う。又は右手の形。中は祝禱を収める器である を木に著けた形。これを手にもち、神に捧げて祭る形式の祭儀を史とい、史祭をいう。

(12) 白川静「釋史」

「史」の甲骨文「」と「事」の甲骨文「」の区別がある。

「史」は内祭であり、「事」は河川や岳、山川の諸神祀るときには、祭りの使者が派遣されこれが「事」である。「事」(𠄎)は又頭のある長桿を持つ形であり、「史」(𠄎)がただ宗廟の中で祝冊の器を神木に懸けて捧持する形であるのに対して、「事」(𠄎)は遠く都外に出て使用する意を含むものとみられる。

「史」が後に史官、記録を司るもの意となるのは、もと史祭における祝詞を保存し、その先行旧行によって伝統を保持し、記録するというその職掌を通じて、のちには文書・記録そのものを保管するものとなったのである。⁽³⁸⁾

3. 「文」についての各文字学者の解釈例

(1) 『説文解字』九上

「錯畫也、象交文（錯はれる畫なり。交文に象る）」と記されている。「文」を交錯する線とする解釈を述べている。

(2) 段玉裁『説文解字注』

「錯畫也 錯當作造。造畫者 造之畫也。考工記曰。青與赤謂之文。造畫之一端也。造畫者文之本義。彰彰者彰之本義。義不同也。黄帝之史倉頡見鳥獸蹠迹之迹。知分理之可相別異也。初造書契、依類象形、故謂之文。象交文 象兩紋交互也。紋者、文之俗字。（錯畫也 錯は當に造に作るべし。造画は 造の画なり。考工記に曰く、青と赤は之を文と謂ふ。造は画の一端なり。造画は文の本義、彰彰は彰の本義、義不同なり。黄帝の史倉頡は鳥獸の蹄迹の跡を見て、分理の相別異すべきを知るなり。初めて書契を造るに、類に依り形に象る。故に之を

文と謂ふ。象交文 両紋の交互するを象るなり。紋は文の俗字」

段玉裁はまず「文」の字義を『説文』に従って交わる線に求め、その次に赤や青の色彩の交わりからみた文様としての「文」、線と画によって成り立つ文字の「文」の意味を説明している。更に『説文解字』叙の倉頡の説明を加え、類によって字形を定めた文字の「文」の意味について述べている。基本的には『説文』に原意を依拠し、引伸義を述べている。

(3) 馬叙倫『讀金器刻詞』

馬叙倫は周代の父乙卯彝の「𠄎」を「文」字とし、「文為黼黻造之畫。固不限於作𠄎也（文は黼黻の造わる画であり、固より𠄎に作るに限らず）」と述べ、「文」の字源を刺繡の糸の交わる線の画としている。

(4) 吳大澂「文字說」⁽⁴⁾





「寧王即文王、寧考即文考」（寧王は即ち文王、寧考は即ち文考）
 吳大澂は『尚書』大誥篇において従来解釈されてきた「寧王」「寧武」「寧考」「全寧人」の「寧」が金文の「𠄎」を基としていたが、それは「寧」ではなく「文」と解釈すべきとした。すなわち「寧王」ではなく「文王」なのである。ところが、彼は「𠄎」の中にある「𠄎」が文身であるとは語っていない。「文」の字源が文身であるとするのは後代の文字学者の解釈に現れるのであるが、吳大澂が重大なヒントを与えたことになる。

(5) 吳其昌『殷墟書契解詁』⁽⁵⁾

「蓋『文』者、乃像一繁文滿身、而端立受祭之尸形云爾（蓋し『文』

は乃ち満身に繁雑な文身をしている様をいうものであり、端立して祭りを受ける尸の形を云うのである」と述べ、亡くなった人に「文」をかぶせていう語である文父・文母・文祖・文王などの語にその字源を求める。しかし、呉其昌のいうように、文身は単に死んだ人間を飾るものだけではなく、生きている人間にも施されていた。したがって、「文」字のそもそもの原意は生きた人間の身体上にある文身である。文父・文母・文祖・文王の「文」の意味はそういった文身の二次的な意味であろう。

(6) 朱芳圃『殷周文字釋叢』卷中

「文即文身之文、象人正立形、胸即之／×、、、即刻畫之文飾也。『禮紀』王制：「東方曰夷。被髮文身、有不火食矣」孔疏：「文身者、謂以丹青文飾其身（文は即ち文身の文であり、人の正立形に象る。胸即ち之／×、、は即ち刻画の文飾なり。『禮紀』王制：「東方曰夷。被髮文身、火食をせざるあり」、孔疏：「文身は丹青を以て其の身を文飾すると謂ふ）」とあり、『禮紀』王制から引用して東夷の地域で生食を食べるものに文身の特徴があることを述べている。「東方曰夷」は周代の「夷」であるから、中国の東海岸にある夷族を指している。この文に続いて「穀梁傳哀公十三年：『吳、夷狄之國也。祝髮文身』（穀梁傳哀公十三年『吳、夷狄の國なり。祝髮文身』）」とあり、吳は「夷狄」となっている。更に、「考文身為初民普遍之習俗、吾族祖先、自無例外（考えるに、文身は初民の普遍の習俗であり、吾が族の祖先、自ずから例外はない）」と述べている。朱芳圃氏によると、「文」字のモデルは一般的な中国の民であるというのであろう。しかしなが

ら、「文」字は「大」や「人」の字形に属さず、これらの類型外と考えられるので、「文」字のモデルは古代殷人以外に求めるべきであろう。

(7) 徐中舒主編『甲骨文字典』

象正立之人形。胸部有刻畫之紋飾。故以文身之紋為文（正面に立つ人の形に象る。胸部には彫り刻んだ紋飾がある。ゆえに文身を以て文と為す。）

(8) 嚴一萍『中國文字』第三卷第九冊

穀梁傳哀公十三年の「祝髮文身」・「禮記」王制の「被髮文身」・「史記」越世家の「翦髮文身」を文身の例に挙げており、「文」字を構成する文身を越族に求めている。

(9) 臧克和『說文解字的文化說解』

「甲骨文中『文』字實在不過是人體輪廓的線條化、抽象化。因此、『文』字的字源，應該是屬於所謂『近取諸身』的『人文』之類。至於『文』字內部所填實部分的符號，則是用來標誌人的『靈巧』的文飾內容的。（甲骨文中『文』字は實際には人体の輪郭の線條化、抽象化である。それで、『文』字の字源は所謂『近取諸身』の『人文』の類に属する。『文』字の字内に書かれてある符號に至っては、則ち器用に書かれた人の文飾の内容を表している）」と述べ、「文」の字形は一般的な人体の輪郭の線條化・抽象化と見ており、それに文飾としての文身の意味を付け加えている。

(10) 中島竊『書契淵源』第一帙中

「余疑文是文身之文（私は文は文身の文であらうと思う）」

(11) 加藤常賢『漢字の起原』⁽⁴⁷⁾

「文」字は「項の部分の襟と、襟が胸前で交叉した形」である。

※ 「𠂔」の「人」は弁の形であり、「𠂔」は弁を被るために髪を包む冠巻きであり、「又」形は布目を表したものとされている。加藤氏は「文」字の文身説については否定している。

(12) 水上静夫『漢字を語る』⁽⁴⁸⁾

「一つは、幾重にも襲ね着をした衣服の襟元が交错し綺麗に合わさった形をかたどった、象形文字であるという。字音の『ブン・ピン』（漢音）は『交叉する・交错する・斜めに組み合わせる・交差する』意からきており、後に細かく美しいもの（↓美）の意にも通じるようになる。つまり本義は襟元で衣服が交错して美しい意である。他の一つは、土器類に刻み込まれた縄文の模様（文様）の一部分（一こま）を描いた象形文字で、『ブン・ピン』の音は『小さい・細かい』意からきていて、こまごと飾り立てた模様のことをいう。どちらにしても物の形を象った絵であることは疑いない」と述べている。

水上氏は字音と「文」字における線の交差の意味から「文」の意を述べている。しかしながら、字音は何時の時代のものか不明であり、その発音が原意を表す文字の時代のものか引伸義を表す時代のものなのかは判別しようがない。やはり原意を見るには字形から見るのが適切と思われる。

(13) 白川静「釋文」⁽⁴⁹⁾

白川博士は「文」を甲骨文・金文に見る人の正面形の胸部に文身の文様を加えた形に象る字としている。白川博士は「文」字の解釈にお

いて他の文字学者より優れているところは、文身にまつわる系列字を列挙し説明していることである。中でも、筆者が感心したことは「凶」「胸」字内の「×」符号が、「文」の甲骨文「𠂔」の「×」と同じ意味符号であることを見抜いたことである。「凶」字については、『説文』七上に「悪也、象地穿交陷其中也（悪なり、地穿たれて、其の中に交陷するに象る）」とあり、「交陷」はおそらく人が穴の中に陥没することをいうのであろう。白川博士のように、「凶」の「×」を呪符と見れば、『説文』の解釈とは食い違う。この呪符が「胸」「胸」の字に至っては文身の意となる。白川博士の考察は非常に卓見といえる。更に、白川博士は「爽」字について、その「×」は婦人の死葬の時に邪霊の憑くのを防ぐために加えた文身だとする。朱で描く絵身であるという。更に「爽」「爾」「彌」はまた「×」を媒介とした同系の意味をもつ文字群であるとする。そうすれば、「文」「凶」「胸」「爽」はすべて「×」形を媒介とした系列文字であることになる。

(14) 白川静『中国古代の文化』⁽⁵⁰⁾

「文」という字形は、その字形の成立した当時における文の觀念を、字の意象のうちに示している。それはまぎれもなく文身であり、屍体聖化のための儀礼をあらわすものである。文がそのような聖標識であるならば、文という字形が成立した当時において、それは一種の神聖觀念を伴うものであった。しかし文身そのものは、おそらくはより素朴な呪的記号、あるいは身分標識として、ひろく用いられていたものであろう。」

日常生活において施されていた文身が屍体聖化のための儀礼の絵身

よりも本来的な文身であると語っている。

六、白川静著作を翻訳する意義

1. 漢字文化は東洋で際立った文化の一つ。したがって漢字を創出した中国においては重要な学問として位置づけられてしかるべきであろう。しかし昨今の状況を見ると、パソコン文化・中国における簡体字などの例に見るように、漢字の効率的使用のみが注目され、漢字の初義から通観できる文字文化の奥行き・そのすばらしい文化性が忘れ去られようとしている。白川静先生はよく「東洋の回復」という言葉を口にされたと聞く。東洋の文化のすばらしさを掘り起こし、東洋の精神的な繁栄と平和の維持を希求されたものであらうと思われる。白川学の翻訳はそうした先生の思いに通じ、漢字の文化性を伝えるものがある。

しかしながら現代の中国では甲骨文字・金文の研究は先人の作成した甲骨文字の解釈集を基礎として総合的に自分の解釈を導き出したものが多い。それに対して白川静先生の学問的方法は原典主義であり、甲骨文・金文の原典や『説文解字』を総合的に取り上げ解釈しなおしたものである。それゆえに体系的である。

2. 白川文字学の内容は中国では一部の評価を得ているが、まだ十分にその詳細が理解されていない。中国では白川先生の『金文通釈』については非常に評価されているのは前に述べたとおりであるが、白川先生の甲骨文の解釈については、その全容が充分に知られておらず、今

後の課題でもある。

3. 中国では甲骨文字を最初に解読した羅振玉、王国維、董作賓は甲骨学の巨頭、それに続く郭沫若、陳夢家、唐蘭、于省吾：が甲骨学の権威として認識されている。そのことにより、彼らの説が金科玉条のように感じてしまう傾向がある。また学問の仕方についても彼らの説を前提として自らの論を展開する学者の傾向も多く見受けられる。白川文字学には字義についての新出の解釈がある。しかも論述が立証的である。

冒頭に紹介したように白川静著作の翻訳本が出ているが、白川文字学の体系的理解ができていないために随所に間違った翻訳が見受けられ、読んでわかりにくい場合がある。現状を考えるなら、わかりにくい箇所には翻訳者が注釈を施すべきであらう。中国では白川文字学の論「口」「文」「史」については一説として見る人も多い。その理由として考えられるのは、現在の中国文字学者は従来の甲骨文字学を継承して、甲骨文字を形象や使用例など狭い範囲で解釈する傾向がある。白川博士のように文字学以外の殷の政治史、宗教観などを通観しなれば個々の解釈ができないのである。これは「森を見て木を見ず、木を見て森を見ず」である。したがって白川文字学の最も優れた論をどのようにして伝えるかを考える必要がある。翻訳だけではわかりにくく、その解釈を咀嚼して解説して伝える必要があると思われるのである。

おわりに

本稿では、中国の文字学者が白川文字学の内容をどのように受容しているかを述べた。それらを踏まえて、私が一番気になったのは白川文字学の系列文字に対する理解が得られていないことである。白川文字学以前には、形声文字や会意文字といった偏旁の組み合わせによる造字解釈や右文説のように形声文字の声符にも意味を求めるものほかに発音を主にして文字の語源を考える方法などあった。白川博士は偏旁よりもっと小さい文字の要素（例えば、口へD・日・×など）にそれらを含む文字に貫通した意味を求めそれを系列文字という体系の中で展開された。その文字学的方法是今後の文字学にとってすばらしい指標になるのではないかと私は考えている。白川文字学の長所をぜひ中国・台湾の学者にも理解していただき、今後の文字学の発展に役立ててほしいと考える。

注

- (1) 羅振玉『殷墟書契考釈』（藝文印書館、1900年）
- (2) 王国維『古史新証』（来薰閣、1935年1月）
- (3) 唐蘭『怎樣去認識古文字』、『古文字学導論』（太平書局、1965年12月）
- (4) 『積微居金文説』増訂本（科学出版社、1959年9月）自序
- (5) 李学勤著、小幡敏行訳『中国古代表漢字学の第一歩』（凱風社、1990年5月）192頁―204頁
- (6) 高明『中国古文字学通論』（北京大学出版社、1996年6月）167―172頁、第三章
- (7) 白川静 新訂『字統』（平凡社、2004年12月）279頁
- (8) 佐伯梅友・馬淵和夫編『古語辞典』（講談社学術文庫、昭和54年3月）165頁、166頁

- (9) 于省吾主編『甲骨文字詁林』（中華書局、1996年5月）1018頁―1026頁参照
- (10) 白川静 新訂『字統』（平凡社、2004年12月）713頁「伯」
- (11) 白川静 新訂『字統』（平凡社、2004年12月）16頁―17頁
- (12) 白川静『中国古代の民俗』（講談社学術文庫、昭和55年5月）298頁
- (13) 白川静『漢字』（岩波新書、1970年4月）4頁―5頁
- (14) 白川静『漢字百話』（中公新書、1978年4月）19頁
- (15) 白川静『文字道遥』（平凡社、1987年4月）248頁
- (16) 朱順龍・何立民編著『中国古文字学基礎』（復旦大学博系列教材）（上海社会科学院出版社、2004年12月）131頁―133頁
- (17) 『漢字文化』（総第78期）2007年第4期、59頁―64頁
- (18) 白氷『青銅器銘文研究―白川静金文学著作的成就と疏失』（学林出版社、2007年6月）
- (19) 白氷は「名」の口を載書の意味ではなく、口耳の口としている。
- (20) 徐中舒主編『甲骨文字典』（四川辞書出版社、1989年5月）87頁
- (21) 饒宗頤『殷代貞卜人物通考』（香港大学出版社、1959年）700頁
- (22) 于省吾主編『甲骨文字詁林』（中華書局、1996年5月）682頁
- (23) 加藤常賢『漢字の起原』（角川書店、昭和45年）396頁
- (24) 趙誠著『古代文字音韻論文集』（中華書局、1991年）39頁―49頁
- (25) 林泰輔『支那上代之研究』（光風館書店、昭和2年）135頁―136頁
- (26) 白川静 新訂『字統』（平凡社、2004年）296頁
- (27) 徐中舒主編『甲骨文字典』（四川辞書出版社、1989年5月）316頁
- (28) 馬敘倫『馬敘倫學術論文集』（科学出版社、1958年1月）200頁
- (29) 陳夢家『史字新釋』（考古學社刊）第五期（1981年）7頁―12頁
- (30) 王國維『釋史』（觀堂集林）（藝文印書館、1956年）卷六
- (31) 吳大澂『說文古籀補』第三（台灣商務印書館、1968年6月）
- (32) 江永『周禮疑義舉要』秋官「皇清經解」卷二四八
- (33) 于省吾主編『甲骨文字詁林』（中華書局、1996年5月）296頁
- (34) 内藤湖南『支那に於ける史の起源』（研幾小録）（弘文堂、1928年）
- (35) 加藤常賢『漢字の起原』（角川書店、昭和45年）448頁
- (36) 白川静 新訂『字統』（平凡社、2004年12月）375頁
- (37) 白川静『釋史』『甲骨金文学論叢』上『白川静著作集』別卷（平凡社、2008年6月）27頁
- (38) 白川静 新訂『字統』（平凡社、2004年12月）375頁
- (39) 馬敘倫『讀金器刻詞』（中華書局、1962年12月）卷中
- (40) 吳大澂『文字說』『字說』（思賢講舍、1893年）29頁

- (41) 吳其昌『殷墟書契解詁』(武漢大學出版社、2008年) 226—227頁
- (42) 朱芳圃『殷周文字釋叢』卷中(中華書局、1962年) 67頁
- (43) 徐中舒主編『甲骨文字典』(四川辭書出版社、1989年5月) 996頁
- (44) 敵一萍『中國文字』第三卷第九冊(國立台灣大學文学院古文字學研究室、1960年10月) 1009—1010頁
- (45) 臧克和『說文解字的文化說解』(湖北人民出版社、1995年2月) 250頁
- (46) 中島疎『書契淵源』第一帙中(文求堂、1934年) 116頁
- (47) 加藤常賢『漢字的起原』(角川書店、昭和45年12月) 218頁
- (48) 水上静夫『漢字を語る』(大修館書店、1999年6月) 8頁
- (49) 白川静『釋文』『甲骨金文論叢』上『白川静著作集』別卷(平凡社、2008年6月) 参照
- (50) 白川静『中国古代の文化』(講談社学術文庫、昭和54年10月) 37頁
- (國立大學法人大阪教育大學教育學部特任准教授)

